

優しく細かい心遣い

上 森 剛

大平正芳先生は、現在の観音寺一高の前身県立三豊中学校の第二十四回の卒業で、私は一年後輩です。茫洋として迫らない風貌は中学生のときからのものでした。中学卒業後、先生とはしばらくお会いする機会がなかったのですが、昭和二十六年頃郷里のことでお願ひがあり、大蔵省へまいりました。池田大蔵大臣秘書官として、宮沢喜一先生や黒金泰美先生等とともに政界入り前後の若さ溢れる頃でした。誠心誠意、敏捷かつ適切にご処理頂きました。事の成否は別として私は本当に感激いたしました。先生が政界に打って出られたのは昭和二十七年十月のことです。連続十一回当選の栄をかち得て遂に総理総裁となったわけですが、大平総理も最初から演説がうまかったわけではありません。後援者、支持者がやきもきすることもたびたびありました。「アーウ、」を除けば実に立派な文章になっていることが判ったのは余程後のことでした。「わしの演説が下手だというが、聴き方の下手な連中も多いことじゃのう」と先生の方では思っておられたかも知れません。

ある時、国会へ先生をお訪ねしたことがあります。院内で四、五名の先客とお話をされていました。それは他党の方々でした。内容は充分判りませんが、今にも掴み掛らんばかりの勢いで、衝視の方々がバタバタと行き交うほどでした。衝立の陰から私もどうなることかと心配しました。そのあと「先生大変でございますなあ」とお慰め申し上げたら、「いやいや何でもないんだよ、相手の立場を尊重し、相手の話をよく聞いて、相手を正しく認めてやれば何のことはないんだよ」と事もなげに言いながら、少しうつむき加減にズボンのポケット

に手を入れて歩いて行かれた後姿は今でも忘れられません。私は六回目から一昨年の選挙まで七回、先生の選挙事務長という光栄に浴しましたが、殺氣立っている選挙のときでさえ先生がおこった顔をされたことは一度もありませんでした。池田内閣の「寛容と忍耐」は、まさに大平先生の巧まざる本心の表現であらうと思います。

先生の日常の生活は実に質素です。無駄な電灯は消す。ご家庭のお風呂なども一度沸かしたら湯がさめないうちに間をおかずにとんどん入れという。そのかわりお世話になった方々への心配り、地方へ行っても旅館の使用人の一人にいたるまで、志げ子夫人と相談しながら細かい心遣いをされる優しさは、胸打たれるものがありました。また先生は奥様をこよなく愛され、あの忙しい分秒刻みの時間をさいて、志げ子夫人の誕生日にお花を買って帰られました。楽しみも苦しみも人知れず共に分かち合った幸多いお二人でした。

中学時代の恩師中井虎男先生が逝去された直後にたまたま私も上京する用件があり、同じ飛行機で隣の席を頂きました。高松空港を飛び立つとすぐ弔辞の原稿を書かれましたが、ふとペンを止めて「上森君、わしのよくな出来ないものが大臣になって、中井先生のような立派な人が田舎で死んで行く、世の中は矛盾してるね」とぼつんとそう言って、遙かな窓外の雲に目をやりながら、また原稿を書き続けられました。先生が恩師先輩を崇める姿勢の低さが、自民党ばかりでなく、他の党派の方々からも厚い信望をかち得て、遂に先進八力国首脳会議の議長を勤めあげた原因の一つではないだろうかと思ひめぐらす次第です。

トップの座にありながら国民の一人一人の心を心とした振る舞い。新宿駅頭の演説を最後に「言うべき時にものを言い、なすべき時にことをなす」日頃の信条をやり遂げた先生。それは千両役者が六方を踏みながら花道をとうとうと揚幕の彼方に消えてゆく壮絶にして華麗なる大平正芳先生のフィナーレの姿であると存じます。先生の偉大な人徳と功業は、私どもの脳裏に何時までも輝き続けることでありましょう。

(上森農機社長)